空襲体験記

中村　千代松
大和町四丁目

戦争の激化に伴い、子供達には学童疎開が始まりました。

大和国民学校に通学していた息子を故郷へ疎開させて、村の国民学校へ転校。私の勤務も静岡市へ転任が出来、毎日の列車による通勤も、やっと慣れて来た頃でした。

昭和二〇年六月十九日の夜から翌二〇日の未明にわたり、静岡市は米軍機による大空襲がありました。

当時、私は国鉄静岡鉄道管理局に勤務しており、たまたま、その夜が庁舎の警備当番でした。弁当も昼、夜と翌朝の分と三食分を持って出勤しました。

今日は空襲もなく、勤務も無事終り、夕刻市内にある宿泊所へ防空用具を身につけて泊まりに行きました。

万一警報が出れば、庁舎へすぐに駈け付ける事になっていたのです。防空服のままで大広間の布団にくるまり、ゴロ寝をしていました。

宵のうちは何事もなく過ぎて、夜中の十二時頃に警戒警報が発令されましたので、鉄兜を背負って庁舎に駈け付けました。全員が集合して待機し、事務室の自分の机の所でラジオの敵機の情報についての放送を聴いていますと、丁度その時、空襲警報のサイレンが鳴り響いたので、みんな緊張して外へ飛び出し、夜空を見上げて警戒したのですが、特に異状はなく何の音も聞こえて来ませんでした。

二〇分位庁舎の周囲を見張り、その後、何か新しい情報はないかと、中庭の防空壕にある指令室へ行って指令の連絡を聞くと、伊豆半島の西海岸を北上する多数の敵機があり空襲警報が発令されたが、その後レーダーから敵機が消えた為、空襲警報は解除になったとのことでした（空襲警報が一度解除されたのは、敵機が他の目標に向かったのではなく、高度を下げて海面スレスレに飛行してレーダーから消えた為らしいという事を、後から聞きました）。そこで、やれやれと事務室へ引き揚げようと、私は防空壕の出入口へ行って、扉を下から押し上げて出ようとしましたが、なかなか扉が開きません。同僚に、「オーイ、扉が開かないぞ」と言ってもう一度力一杯押し上げると、やっ

と開きました。その瞬間、パッと目に入ったのは、広場全体が火の海になっている光景でした。

庁舎はと見ると、一階も二階も窓硝子は破れ、炎が噴き出しています。先程、扉が開かなかったのは、硝子の破片などが扉の上に飛び散っていた為だったのです。

焼夷弾はエレクトロン型らしく、地面は炎の草が生えたかのように三〇センチ位の高さの火柱が一面に立っていて、足の踏み場もありません。

思わず大声で壕の中へ、「空襲だ。庁舎が燃えてるぞ！」と叫ぶと、皆びっくりして飛び出して来ました。庁舎は、全部の部屋から火炎を噴き出しているので、近付く事ができません。

市街の方を見ると、皆火柱が上がって燃えています。

上空では、敵機がブンブン音を立てて飛んでいるので、もうとても消火活動などできる状態ではありません。火に囲まれてしまったらお仕舞です。明日にでも召集令状が来るかも知れない現在、これは早く安全な場所へ行くべきだと同僚と二人で線路に出て、安倍川に向かって駈け出しました。

上空は相変わらず敵機が市の中心から郊外へと、丁度庭に如雨露で水を撒くように焼夷弾を次々と落としていきます。

頭の上で、ザザッ！と音がすると、地上二百メートル位の所で、またパンパンと爆発音と共に火花が散り、丁度隅田川の川開きの花火を見ているような光景です。そして、それが地上に落ちてから発火して、家屋が真っ赤な炎を噴き出して燃え上がります。また、時々機銃掃射の音も聞こえて、線路の上は危ないと感じましたので、線路の下の小道に下りました。

頭の上で、パンパンと音がすると、急いで身を隠す場所を探して、板一枚が掛かっている橋でも溝へ飛び込み、腰まで水に浸かって頭を隠したりしました。

道路沿いの防空壕は、どこも一杯でした。

頭上の敵機は何機いるのか、煙が真っ赤に空を覆っていて、よく判りません。

逃げる途中で、ドスン、ドスンと鈍い音がして、前後左右に何か落ちて来ます。これは、焼夷弾を束ねてあった金属製の箍が落ちて来たのだと後から聞きましたが、これがもし頭にでも当ったら、イチコロだったのではなかったかと思います。

ふと気がつくと、一緒にいたはずの同僚がいません。いつどこで別れてしまったのかも判りませんでした。

のどが乾いて、唾も出ずヒリヒリして歩けないので、どこかに水がないかと歩きながら探していますと、一軒の住宅が目に入りましたので、そこで戸を叩いて声を掛けたのですが、誰もいないようです。仕方なく裏へまわり、井戸でポンプを煽って冷たい水を充分飲んで、やっと元気を取り戻して、また走ったり止まったりを繰り返して漸く安倍川の土手に辿り着いたのでした。

川原を見渡すと、周囲は昼のように明るく、機銃掃射を恐れて川原の窪みには布団を頭から被った人、子供を背負った人など、みんな命からがら逃げて来た人ばかりです。砂利を採った後の窪みは、どこも人で一杯です。私もやっと小さい窪みを見付けて貼りつくように横になり、市内の方を見ると、敵機はまだ盛んに焼夷弾を投下していて、駅の付近や浅間神社の西方で大きな爆発が続いています。時々赤ずんだ黒煙の上にドラム缶が吹き上げられるのが見え、物凄い状況でした。

四時頃になり敵機はようやく引揚げたらしく、プロペラの音も聞こえなくなりました。

ああ敵機はもう去ったのだ。とても長い長い時間でした。今思い出してもゾッとします。

そのうち夜が明け周囲の人々の顔が見えてくると、誰もが呆然として座りこんでいます。

私もようやく腰を上げて、川の水で顔を洗って四方を見渡したところ、敵機は安倍川を越えて隣の用宗（もちむね）の町や、その北側の山にまで焼夷弾を落したらしく、山火事を起こしていました。土手伝いに線路に上って眺めますと、まだ所々で黒煙が上っており、静岡駅の南側では何か爆発が続き、どす黒い煙を上げ時々ドラム缶が吹き上げられているのが見えます。

私は線路伝いに静岡駅の方へと歩き出しました。途中で貨物列車が焼けて停まっていましたが、有蓋貨車の中から輸送中の弾薬が爆発して四方に飛び散っていて危なくて近寄れないので、線路から離れて市街の道路へ出ますと、焼けたトタン板、硝子、屋根瓦等の障害物が散乱している中に、リヤカーがあるのでよく見ますと、男女の見分けもつかない黒焦げの死体、手足は骨が露出している死体等。家族を先に避難させて、自分は荷物をリヤカーに積んで後から逃げる途中で火に巻かれたのではないかと思いました。

道路の熱気で靴が熱くなり、長くは歩いていられません。どこを見ても焼け野原です。

漸く六時頃役所の焼け跡へ到着しましたが、よくもこれだけ徹底して焼けたものだと思いました。焼け跡にただ一つ大型金庫が赤く焼け残って立っていただけでした。正門付近の木の棚が一本だけ焼け残り、まだ煙が時々出ています。用水堀の水を掛けようと思いましたが、バケツ一個残っていなくて、ただ呆然としてなすすべもなく立っているのみでした。

また、昨夜私が防空壕を出た入口では、総務のA氏に焼夷弾が当たり亡くなったそうで、職責上駈け付けたのでしょうが本当にお気の毒でした。

十時頃、線路も復旧して通勤列車が入って来ました。同僚達も駈け込んで来て慰めてくれました。

ふと気がつくと、まだ朝食もとっていなかったので、腰につけていた竹行李（こうり）製の弁当箱を開いたところドブ臭いのです。考

えてみますと、昨夜避難の時、ドブに飛び込んだりしたので、その為だという事がわかり、せっかく用意して持って来たのに無駄になってしまいガッカリしました。

私も大和町で何回も防空演習に参加して、建物や塀に焼夷弾を仮想した赤い玉を置いた所に、隣組の人達が多数でバケツリレーで消火訓練を行いましたが、最近問題となっている都市の大地震によって起る火災などと違って、空襲による火災は、常に頭上に敵機がいて、次々と火災の原因となる焼夷弾を落としていくのです。

一軒の家に二、三個、多い家では六個も落ちたと聞きました。これが軒並ですから消火どころではありません。

如何にして脱出すればよいのか。家の中が一度に燃え上るのですから大変です。演習と実際とでは大きな違いがある事を痛感しました。